〔第3種郵便物認可〕

石巻・大川小 遺族らが講師

子どもの命 守る意識を

学校防災 初の新任校長研修

東日本大震災で児童・教職員84人が犠牲になった石巻市の旧大川小で4日、県教委主催の新任校長研修会が開かれた。被災地での現地研修は震災10年目にして初めてで、ともに同小6年生だった娘を亡くした元中学教諭の佐藤敏郎さん(57)と現職校長の平塚真一郎さん(54)が講師を務めた。2人は遺族や学校現場をよく知る立場から「目の前と未来の子供たちの命を守る意識」を高めるよう呼びかけた。

【百武信幸】

研修で大川小を訪れた校長たちに話をする佐藤敏郎さん＝いずれも石巻市で、和田大典撮影

同小の児童23人の遺族が市と県を相手取った訴訟で、学校や教委の事前防災を不備と認定した仙台高裁判決が2019年10月に確定。同12月の遺族説明会で県教委の伊東昭代教育長が現地研修の開催を表明していた。それまでは係争中のため同小を訪問したり、児童遺族の話を聞いたりする県内の学校関係者は限られていた。

この日は今年度から新たに県内公立学校の校長となった90人が参加。講師の2人はそれぞれ、語り部や講演を通じ大川小の教訓や学校防災の心構えを全国で発信してきた。

15年3月に中学教諭を退職した佐藤さんは、顔見知りも多い校長らに、震災以前の学校の風景を説明しながら「この校庭を見ながら、自分の学校を思い浮かべてほしい」と呼びかけた。津波の襲来直前に触れ「先生たちも必死で子供たちを抱きしめたかもしれない。でも遅すぎた。その後悔と向き合わなければならない」。当時、裏山避難を求めた教員もいたことから「一人一人の危機意識が組織の意思決定、行動につながらなかったことが問題だ」と訴えた。一方で「震災10年目で研修が行われたのは50分間動けなかったあの日の校庭と似ている。シンプルかつ丁寧に命と向き合えているか」と問いかけた。

大川小で平塚真一郎さん（手前）の話を聞く校長たち

名取市立みどり台中校長の平塚さんは「なぜ大川小の先生も亡くなったのに責められるのか、と思ったかもしれない。でも保護者からすれば我が子が突然いなくなれば、それまでの教育がいかによくとも一切無になる」と語り、「我が子も家族も地域の運命も変わった」と広い視点での理解を促した。

「自分がこの場にいて救えたか」と自問し「自分なら救えたと思う人がいたら気をつけた方がいい。想像力が足りない」と注意喚起。「人間は追い詰められると経験則に頼る。とっさに正しい判断をするには日ごろの教員研修や防災教育が重要で、避難訓練は将来、その子たちがどこかで自分や他の人の命を救うことになるかもしれない」と語りかけた。

参加した大崎市立松山小校長の岡本由紀さん(49)は「子供たちの命を守り抜くことが大事だと痛感した。教職員一人一人が判断し行動できるよう、何でも言える風通しよい職場を作ることがいざという時の正しい判断につながる」と話した。県教委は来年度以降も新任校長や新規採用教員の被災地研修を検討するという。